公害研究会について

岡 本 舜 三

公害についてその害を論じ,防止を叫ぶのはやさしい.むずかしいのは進んでこれを解決することである.問題をぎりぎりに追い込んでみると,案外素朴な問題がうかんでくる.そしてそのことの解決が議論だけではどうにもならないことに気づくのである.

例をあげよう.大都市の空には常にスモッグがたなびいている.仲秋明月どころではない,太陽さえろくに浴びられない.その原因は自動車の排気ガスではないか.浄化設備をとりつけよという.そんなことをすれば車の生産費は上がり輸送費にもひびく.ひいては諸製品のコスト高となり貿易にもさしつかえよう.第一,スモッグの主因が自動車にあるということは事実でないと反論する.これが大気汚染問題の実相であろう.

また都市内を流れる河川の下流部では住民は不衛生でとてもたまらない,川に廃水を捨てるとは何ごとかと怒る.しかし上流の中小工場ではこうしなければ企業がなりたたない.完全な浄化を求めるのは企業をつぶせというのと同じだと主張する.これが河水汚濁問題の実相であろう.

これらは世間にいくらでもある紛争の一つのようにみえるけれども,不特定多数がおこす不特定多数の被害の問題だけに複雑である.また自然科学と人間の問題がからんでいることも問題をいよいよ複雑にしている.したがって単なる「まあまあ」的な仲裁では処置できないし,法律論のみでは解決にならない.

われわれ工学研究者としては,公害の恐ろしさは知らねばならないが,しかし今の日本の状態では生産増強の重要さはいささかも軽く見ることはできない.解放経済のむずかしい事情下において新技術の開発こそ目下の緊要事である.公害問題は生産増強に伴う一つの歪みであるが歪みに注目するあまり生産増強や新技術開発にブレーキがかかることは極力避けねばならない.いわゆる角をためて牛を殺してはならないと考えている.

この一見相対立した条件を相入れるものになし得るのはひとえに科学技術の力であり,これに対する世間の理工系研究者に対する期待は大きいと思うのであるが,この問題追求に一つの条件を与えるものに人間の心理の問題,社会科学上の問題がある.たとえば恕限度の問題として,現在では河川の汚濁についてある人が不快であると主張すれば,それを否定できる根拠はない.しかしこの不確定な主張をもとに河川浄化を合理的に行なうことは不可能である.したがってこの問題の解決には文科系研究者の協力が必要と思われる.

このような一見素朴に見えてその実は本質的にむずかしい問題に対処するには問題の表面のみを見ず,一度もとまで掘り下げて基礎から研究を行ない,しかる後これを総合することが正しい道である.この基礎的の面については幸いにして当研究所ならびに社会科学研究所は,それぞれ技術面および社会科学面について,すでに高いポテンシャルを持っているので両者が共同の研究の場をもつことは問題解決の上に有効であろうと思われた.それで本年初めから,両研究所の有志で共同の研究会が作られ,今日までですでに数回の会合がもたれ,初めは知識の交換からついで意見の交換に及んでいる.

ただ会合を通して感じられることは,数量で組み立てられた工学の次元と,慣習を主として組み立てられた法学の次元とのかみ合いが,両者を同時にはかる共通の尺度が見つからないために実に容易でないということである.

人間問題がもし科学技術上の問題と同じ尺度で論じられるようになれば,恕限度の問題なども一応は合理的に解決され,基礎的科学技術の進歩が,そのまま公害問題解決に直結することになるであろう.

もちろんこの道は遠いようである.しかし私としてはいまはまだ十分にはかみ合っていないにしても,せっかく新しい試みとして始められた文科,理工両系研究者の連合研究組織が根気よく育てられて,当面の問題だけでなく,この異なった次元を結ぶ共通の尺度を見出すべく努力されることに非常な期待をよせている.もしそうなれば,公害問題を合理的に処理できる道が開けるのみならず,さらに人間の生活環境,人間活動の一たる生産活動も飛躍的に改善前進することになろうと思われ,この研究会の発展に多大の期待がよせられるゆえんである.

(1965 年 10 月 25 日受理)